

令和8年度入試

前期選抜試験入試問題

国語

[令和8年1月17日（土）実施]

〈注 意〉

- 1) 試験開始までこの冊子を開いてはいけません。
- 2) 答えは、すべて解答用紙に記入してください。
* 解答用紙の中にはさんであります。
- 3) 解答用紙には、受験番号のみを記入してください。
- 4) 試験時間は50分です。
- 5) この冊子を持ち帰ることはできません。
* 試験終了後に回収します。

昭和学院高等学校

一、次の【文章Ⅰ】【文章Ⅱ】を読み、後の問いに答えなさい。設問の都合で、【文章Ⅰ】の段落に①～⑬の番号を付してある。なお、出題の都合上、表記を変えたところがある。

※句読点や記号も一字分とする

【文章Ⅰ】

①日本人は謝りすぎだと、外国人学生が言う。アルバイト先で、同僚がささいなことを頼んでくる。同僚はそのたびに、「ごめん、これやってくれる?」「ごめんね、ちょっとそれとってもらっていいかな」「ごめんなさい、それ貸してもらえます?」と謝る。なぜこんなに謝るのか、なぜ仲間内でそんなに気をつかうのか、彼女には疑問だ。ア、電車に乗ると、足を踏んでも「ごめんなさい」も「すみません」も言わないで、平気な顔をして人をぐいぐい押す人たちに出会う。

②そこで彼女は考えた。「それ、とってくれる?」「はい、どうぞ」「どうも」というやりとりで十分だと自分は思うが、日本人は相手のことを思いやるから、人に何かを頼むと、その人が迷惑に感じるかもしれないと考えるのではないか。それで、迷惑をかけて申し訳ないという気持ちになる。だから、まず謝る。人に遠慮するのだ。A日本人は優しい心の持ち主なのだ。

③しかし、と学生はさらに考える。どうでもいいことでいつも謝っていると、「ごめんなさい」や「すみません」の意味は非常に軽くなる。a本^レ当^レに謝^レらなければいけないときに、意味をなさなくなる。これはよいことではない。それから、電車の中の失礼な人たち、この人たちと、よく謝る同僚たちの態度の違いの説明がつかない。

④「よくわからなくなりました。先生、教えてください」

⑤学生は、仲間内では気をつかい、ひっきりなしに謝罪の言葉を口にする人々と、赤の他人の中だと無礼で無口になる人たちとのギャップに戸惑っている。そして、これは反対ではないのかと言うのだ。b親^レしい者^レ同^レ士^レなら、そんなに謝^レらなくてもいいが、知らない人の足を踏んだら謝^レるべきなのではないかと。

⑥人に気をつかう。遠慮する。迷惑をかけたら申し訳ないと思う。礼儀知らずと思われたくない。無礼だから仲間はずれにされたくない。自分の居場所を確保するためにも、仲間にはよく思われたい。実際に相手を傷つけたり犠牲を強いたりしたわけでもないのに、同僚に向かって「ごめんね」を連発する理由はこんなところだろうか。どれも、社会の中で生きる者としては理解できる感情だ。和を重んじ、輪を大事にする。和を保つために気をつかい、輪の外に追い出されないように気をつかう。

[7] この、C 和と輪の精神は、ひとたび他人の中に入ると忘れ去られてしまうのだろうか。外国人学生の疑問もそれだった。実は、忘れ去られてしまうのではなくて、むしろ、B 和と輪の本来の姿が強調されるだけなのではないかと、私は思っている。

[8] 和と輪の本来の姿の強調とはどういうことか。
イ 電車の中で、自分は今、自分にとつて大切な輪から離れている。だから、ここでは気をつかわなくてよい。大切な輪は、居心地は悪くないが（悪くならないように気をつかっているのだ）、そこにいる人たちの顔色を毎日うかがっていないなければならないのも事実だ。今いる場所はそうではない。気をつかう必要はない。多少の迷惑はお互い様。周りに知り合いはいない。
ウ だ。

[9] 一方で、そこには和も存在する。ことさらに意識していないかもしれないが、人々は和の存在を認めているはずだ。その和は、和やかな和でもあるが、どちらかといえば平和の和に近い。世の中が平和だと、安心して暮らすことができる。用心する必要もない。緊張も要らない。本物の悪人はいない。大多数の人々は善意に満ちている。だから、少しぐらい足を踏んでも背中を押しても、相手は気にしないだろう、許してくれるだろう、気づいてすらいらないかもしれない、黙っていても相手は怒ったりしないだろう、怒って危害を加えてくるなどということは絶対にないだろうと、頭から信じて安心してきっているのだ。

[10] 私の訪れたいくつかの国々に限定して言うと、それらの国では、この和の存在、とりわけ公共の乗り物の中で、のどかで無邪気で平和的な雰囲気^{雰囲気}をあまり感じることはなかった。いずれも先進国で、実際には、日常生活を営む上で支障となるような危険などまずないのだが、大都市内の一部の地区では特に、一歩表に出ると用心に用心を重ねて歩き、夜遅く一人で地下鉄に乗らなければならぬようになったときには、緊張しながらも周囲を注視して隙を見せないよう努めた。

[11] そして、これはC逆説的になるが、他人を無条件に信じないからこそ、エレベーターに乗り合わせた見知らぬ人と笑顔で挨拶を交わすのだと、身をもって知った。私は怪しい者ではない、私はあなたに悪意を抱いていない、私はあなたに害を与えない、私は見てのとおり感じのいい人間だ、だからあなたも私に変なことをしないように、というメッセージでもあるのだ。

[12] 私が今までに訪れた国では、地下鉄やバスの中で、何も言わずに人を押しのけて進む人はいなかったが、それは、そんなことをしたら、ほかの乗客から罵られるか小突かれるか蹴つ飛ばされるからだろう。網棚に荷物を載せて口をあけて眠っていても、自分も荷物も貴重品も無事に目的地まで運ばれる国は、やはり平和なのだ。ズボンの後ろのポケットからブランド物の財布を覗かせて繁華街を歩くことのできる国は、絶対に平和なのだ。エレベーターの中で黙れもせずにいられるのは、見知らぬ同乗者を無条件に信頼することが許される平和な国だからだ。この平和な国には、心優しい人たちが大勢いる。

[13] 皮肉でも何でもない。私は本気でそう思っている。優しいことはいいことだ。しかし、どんなものごとにも複数の側面がある。心優しい人々は、ほかの

優しい人々に全幅の信頼を置き、優しい人々に甘える。黙っていてもわかってもらえると思っている。居心地のよい状態は維持したいものだが、dぬるま湯にずっと浸かっていると、判断力が鈍ることもある。e黙っていてもわかってもらえるという甘えは、その一つの例だろう。

(野口恵子『バカ丁寧化する日本語 敬語コミュニケーションの行方』より)

【文章Ⅱ】

金田一氏が強調するのは、日本語ほど国籍と使用者が一致する言語は珍しいのではないか、という点である。つまり、「日本語Ⅱ日本国の言語Ⅱ日本人」の構図が成立するというのだ。日本語は日本国内でどこでも通じる一方、海外では通じない。fこれは特殊な状況であるということを、金田一氏は様々な文献をひきながら論じている。

確かに日本国外で日本語が広く通じる国はない一方で、g日本国内ではどこでもだいたい日本語が通じる。「大泉町(ブラジル人集住地域)はポルトガル語があふれているぞ」とか、「ハワイは日本語が通じるぞ」などという反論もあるだろうが、あくまで他の言語と比べたうえでの議論である。多くの言語はこんなに国境と話者が一致しないというのが趣旨である。ここで表明されている国境と日本国籍と日本語使用者が一致するという考え方を本書では「日本語Ⅱ日本人語仮説」と呼びたい。

h日本語Ⅱ日本人語仮説は、日本人は均質であるという発想と結びつきやすい。国内には日本語を話す同質の人間がいて、国外には日本人と異質な人間がいるという考えである。

確かに、アイヌや琉球、りゅうきゅう在日の多様性を認めたくえでも、相対的に見て日本人が均質であるという点は多くの識者が指摘しているところである。※商慣行における日本人の同質性を指摘する外国のビジネスマンも多い。また、iガッツポーズをした外国人力士が批判されたり、刺青の外国人観光客がお風呂から素っ裸で追い出されたりというニュースに触れるたびに、我々の社会に存在する暗黙のルールを考えることになる。そして、j我々と彼らを線引きするラインが浮き彫りになる。

※ 商慣行……ビジネスの場での慣習やルール。

(岩田一成『やさしい日本語ってなんだろう』より)

問一 空欄 **ア**、**イ** にあてはまる語句として最も適当なものを、次の1～6のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号を二回使うことはできない。

- 1 ところが 2 なぜなら 3 そうすると 4 したがって 5 たとえば 6 やはり

問二 傍線部A「日本人は優しい心の持ち主なのだ」とあるが、なぜそう言えるのか。「日本人」という語句を用いて五十五字以内で説明しなさい。

問三 傍線部B「和と輪の本来の姿」とあるが、その説明の組み合わせとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 「和」…安心感を得るために周囲の人に配慮し、平和を保つこと 「輪」…社会において、親しい者たちで構成される自分の居場所のこと
- 2 「和」…他者とのつながりを保つため、周囲との調和を重んじること 「輪」…社会において、自分と親しい者との信頼関係のこと
- 3 「和」…緊張感を持つ必要がなく、自身が脅かされる不安がないこと 「輪」…社会において、行動様式が同一の者のコミュニティのこと
- 4 「和」…崩れることのない穏やかで安定的な関係性を築くこと 「輪」…社会において、各自がためらわずに個性を出せる場のこと
- 5 「和」…互いの気づかいが求められ、細やかな配慮が必要なこと 「輪」…社会において、学校や職場などの身近な人間関係のこと

問四 空欄 **ウ** にあてはまることわざとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 瓢箪ひょうたんから駒 2 旅の恥はかき捨て 3 後悔先に立たず 4 百聞は一見に如しかず 5 覆水盆に返らず

問五 傍線部C「逆説的になる」とあるが、どのような点が「逆説的」なのか。それを説明した次の文の空欄 **1** (五字)、**2** (一字) にあてはまる語句をこれより後の本文中(文章I)から抜き出して答えなさい。ただし、**1** には二箇所とも同じ語句が入る。

本来公共の場においては **1** と言葉を交わさなはずなのに、自分が相手に **2** のない人間であることを示すために、**1** とも言葉を交わすということ。

問六 【文章Ⅰ】には次の一文が抜けている。どの段落の最後に入るのが最も適当か、次の1～6のうちから一つ選びなさい。

むろん、だからといって、公共の場で今のまま無礼な態度をとり続けるのがよいとは思っていない。

- 1 [1] 2 [5] 3 [7] 4 [9] 5 [11] 6 [13]

問七 (i) 授業で【文章Ⅰ】を読んだ生徒たちは、それに関連して【文章Ⅱ】を読んだ。【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】の関連をそれぞれのどの記述から読み取

ったのか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 【文章Ⅰ】の破線部 a 「本当に謝らなければいけないときに、意味をなさなくなる」と【文章Ⅱ】の破線部 j 「我々と彼らを線引きするラインが浮き彫りになる」に関連性があるとして、日本人は「線引き」をしてしまうために本当に謝らなければいけない時がわからなくなるのだと考えた。

- 2 【文章Ⅰ】の破線部 b 「親しい者同士なら、そんなに謝らなくてもいいが、知らない人の足を踏んだら謝るべきなのではないか」と【文章Ⅱ】の破線部 g 「日本国内ではどこでもだいたい日本語が通じる」に関連性があるとして、相手との関係と単一言語であることが日本人の行動を決めると考えた。

- 3 【文章Ⅰ】の破線部 c 「和と輪の精神は、ひとたび他人の中に入ると忘れ去られてしまうのだろうか」と【文章Ⅱ】の破線部 f 「これは特殊な状況である」に関連性があるとして、日本人は「和」と「輪」が成立すると安心してしまうことを「特殊な状況」だと考えた。

- 4 【文章Ⅰ】の破線部 d 「ぬるま湯にずっと浸かっていると、判断力が鈍ることもある」と【文章Ⅱ】の破線部 i 「ガッツポーズをした外国人力士が批判されたり」に関連性があるとして、暗黙のルールが日本人の行動を規定し、状況によって適切な判断を妨げることもあるのだと考えた。

- 5 【文章Ⅰ】の破線部 e 「黙っていてもわかってもらえないという甘え」と【文章Ⅱ】の破線部 h 「日本語Ⅱ日本人語仮説は、日本人は均質であるという発想と結びつきやすい」に関連性があるとして、「日本人は均質」と考えると、日本人ならわかってもらえないという発想に結びつくと考えた。

(ii) 生徒たちが二つの文章について話し合いをしている。生徒の発言のうち本文の内容に合わないものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 Aさん——【文章Ⅰ】では、外国人学生が「謝りすぎる日本人」について、不思議に思っている様子が述べられていたね。考えてみると、日本人は仲間内で気をつかう場面は多いんじゃないかな。

- 2 Bさん——確かにそうだね。また、【文章Ⅰ】で外国人学生は、仲間内では頻繁に謝罪の言葉を口にするのに他人には謝らなくなる日本人のあり方に疑問を持っていたよ。

3 Cさん——【文章Ⅰ】の筆者は、その外国人学生の疑問に対して「和と輪の精神」という考えを述べていたね。そこには日本人が平和に慣れていることや危機感の薄さが垣間見えることを批判的に論じていたよ。

4 Dさん——【文章Ⅱ】では日本語について、国境と国籍と言語の使用者の一致する度合いの高さに言及していたよ。日本ほどその三つが一致する環境は珍しいんだね。だから日本語は「日本人語」とも呼べるということだったね。

5 Eさん——そうだね。そうだったことも関係して、【文章Ⅱ】では、海外と比べて日本人は均質だという考えになりやすいのだと書かれていたよ。
国内で日本語を話す日本人は皆同質であり、それに対して国外には日本人とは異なる異質な人間がいると考えるんだね。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがある。

僕は走っている。

※句読点や記号も一字分とする

田んぼのあぜに足を取られそうになりながら、野っ原に建つ黒々とした鉄塔を視界の隅に入れて。鉄塔を回ったほうが早いかな、いや、もっと近道はなかったつけと頭の中でいろんな考えが点滅するが、ともかく走る。

ばあちゃんが死んだという電話があったのは、ちょうど小学校から帰ったときで、家の中で電話がけたたましく鳴っていた。母は朝早くから病院に行きたきり。父は東京に仕事に行っていてすぐには帰れないというし、電話に出られるのは僕しかない。A見計らったような鳴り方に「あ、これはお母さんからだな」とピンと来た。

急いで受話器を耳に当てると、予想通り、電話をしてきたのは母で、周囲でせわしなく人が動いている気配がした。きっと、県立病院の待合室かロビーあたりだったのだろう。

「すぐに来なさい。叔父さんをつかまえたらええわ。いま先生に呼ばれたばかりで手が放せないから、あんたから、ばあちゃんのこと話しておいて」と母は言った。

叔父さんの電話番号なら分かっていた。叔父さんは母の弟で、隣町の自動車修理工場で働いている。しかし、なぜか携帯が通じないのだ。受話器の向こうからは、「ただいま、電波の届かない場所にいるか、電話に出ることができません」というロボットみたいな女の人の声がして、僕はすぐに受話器を置いた。

この町は山あいにある。叔父さんとはときどき、山の奥のほうにも※エンコした車の修理に行く。携帯の通じないトンネルの中にいるということだってあり得るのだった。

僕の頭は忙しく動いた。母が病院で待っている。何よりも、ばあちゃんが待っている。

一番早く県立病院に行くには、叔父さんからの連絡を待ったり、一時間に一本しかない巡回バスに乗るよりも、田んぼを突っ切り、最近できたばかりの高速道路の下をくぐり、また田んぼを突っ切って県道に出て、県道にあるガソリンスタンドの横道に入り、ショッピングセンターの駐車場を通り抜け、そして、その裏の橋を渡るのが一番。すると、川を見下ろす小さな丘があつて、それが県立病院の敷地だ。バスがうねうねと町中を走り、いろんな停留場に止まって、県立病院の前を通る時間より、僕のほうが絶対に早く着く。Bそう思ったら、もう走り出していた。

田んぼの中は黒々としていて、濡れた土が冷たく靴底にしみてくる。それでも車がひっきりなしに通る県道沿いの道を走るよりはるかに気持ちがいい。

信号がないのもいい。若草のいいにおいもした。

走りながら、自然にばあちゃんのことを考えた。僕が最後にばあちゃんを見たのは昨日の午後のことで、学校から帰って、台所で水を飲んでるときだった。コップから飲む冷たい水は咽喉にしみて、ホッと息を継いだとき、台所の出窓の向こうにばあちゃんの姿が見えた。ア ばあちゃんが箸はしに入れているのは、たぶん間引きした畑の野菜だろう。緑色のものがこんもりと箸を覆っていた。

コップを流し台に置いて、二階の自分の部屋に行こうと思ったときだ。視界の端っこで、ばあちゃんが前のめりになるのが見えた。イ 僕は思わず笑った。ばあちゃんの体がバツタみたいに見えたからだ。箸がぼんと放物線を描いて用水路に落ちたのもおかしかった。ばあちゃんは、両腕をくの字型に曲げて、腕立て伏せみたいな格好のまま、顔だけを上げていた。

「みっともねえの」とまた僕は笑った。あれっと思ったのはそれから数十秒してからだった。ウ さっきまで上げていた顔が地面にくっついて、完全にばあちゃんは煎餅せんべいみたいになっていた。

「おーい、ばあちゃん」

呼んでも返事をしない。エ いつもの顔じゃないのだ。手も足も引きつって強張り、顔は青白く見えた。目が右側だけ半分開いていたが、その目玉も全然動かない。

十分くらいして救急車が来た。呼んだのは隣の家のおばさんだ。同時に僕がすぐに母の携帯に電話し、母は午後だけパートで働いている県道沿いの郊外型マーケットからすごい勢いで車を飛ばしてきた。それから僕はばあちゃんに会っていない。

〈中略〉

ばあちゃん、あと少しだ。県道を走る車が見えてきた。車をやり過ごして向こう側に渡り、ガソリンスタンドの横に入って、橋を指せば橋の先の丘の上に病院がある。

あと少し。

汗びっしりだったのでジャージのズボンからハンカチを出そうとしたとき、僕はポケットの中にある小さな筒のことを思い出した。ばあちゃんの口紅。口紅というのは正確じゃないかもしれない。たぶんリップクリーム。うっすらとしたピンク色の女の子向けのヤツだ。それも安物。ばあちゃんはこの口紅を

愛用していた。毎朝、台所のテーブルで透明なプラスチックのキャップを開けて、右手の小指の先を筒に突っ込み、小指についたピンク色を唇に塗っていた。すると顔が少しだけ明るくなる。

ちびても捨てなかったのは、きつとあの淡い色が気に入っていたからだろう。「新しいの、買えばいいじゃない。底の底まで使うなんて貧乏くさい」と母は言っていたが、ばあちゃんは「まだ当分は持つよ」と平然としていた。

家を出る前、台所のテーブルの上にあったのをとっさにズボンのポケットに入れたのはどうしてなのか。あのとき、なんだかばあちゃんがそれを待っている気がしたんだ。早くばあちゃんに届けてやらなくちゃ。そんなことをチラッと思った気もする。用水路のほとりで最後に見たばあちゃんの顔に血の気がなかったからかもしれない。でも考えてみたら、いまさらこんなものを持って行っても何の役にも立たないだろう。ポケットの中にはハンカチと家の鍵と、くしゃくしゃになったティッシュペーパーが入っていて、その間で口紅の筒は、僕の体温を吸ってひどく生ぬるく、頼りないほど小さかった。

川が見えた。橋を渡る。猛スピードで丘への坂道を駆け上がる。病院の白い壁が川の反射でいつもより白く光っている。その大きな白い壁の正面に開いているガラスのドアに、僕は一気に駆け込んで行った。

ずいぶんあとになって、僕は思ったものだ。ばあちゃんのためにとっさに選んだものは正しかったのだと。あの薄いピンクの口紅、というかりップクリュームは、ひどく青白かったばあちゃんの顔を、少し明るくしたのだから。

母は、病院のベッドの横に放心したような顔で座っていたが、僕が「これ」と差し出したばあちゃんの口紅をびくりしたように眺め、それからいきなり「バカ」と言って笑った。C 笑いながら泣いていた。それから母は、ばあちゃんとそっくりの手つきでプラスチックのキャップを抜くと、右手の小指を筒の中に突っ込み、指先についた淡いピンクをそとばあちゃんの唇に塗ったのだ。

D あのと、僕はなぜ、「ああ、間に合った」と思ったのだろう。ばあちゃんの顔が明るくなって、額や口元の皺の全部が消えて、なんだか子どもの顔みたいに見えたとき、僕は、自分がずっと走ってきたのはこのためだったんだと、はつきりと分かったのだ。

やっと連絡が取れたのか、胸やひざに油のしみた白いつなぎ服姿の叔父さんと、東京から急いで戻ったらしい父が、E 息せき切って走り込んできたのはそれから間もなくだった。

僕たちは、少し話をしてからベッドの両脇に並んだまま、静かにばあちゃんを見下ろした。白い布団の中でずいぶん小さくなったように見えるばあちゃんの顔。手術の後に白い包帯を巻かれ、ネットのキャップをかぶせられた大豆みたいな顔に、一点だけ春のような灯が点っていた。

父が鼻が詰まったような声で何か言った。かすれてひどく低い声だったのでよく聞き取れなかったが、たぶん、「X」という意味のことを言ったんだと僕は思う。

※ エンコ……自動車が故障して動かなくなることを。

いなばまゆみ
(稲葉真弓「唇に小さな春を」『藍の満干 色のあるファンタジー』より)

問一 傍線部A「見計らったような」、E「息せき切って」の本文中での意味として最も適当なものを、次の1～5のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

A「見計らったような」

1 ちょうどよい時を選んだかのような 2 突発的で予想できないような 3 慌てて決めたような

4 こちらの都合を無視したかのような 5 事前に打ち合わせをしたような

E「息せき切って」

1 静かに息をひそめて 2 ゆっくり穏やかに長い息をして 3 呼吸を忘れるほど驚いて

4 息をつく暇もないほど急いで 5 深呼吸をして気分を切り替えて

問二 傍線部B「そう思ったら、もう走り出していた」とあるが、このときの「僕」の説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

1 「ばあちゃん」が死んだことを叔父に話してほしいと母に言われ、叔父に電話を試みたものの電話が通じず、その上のような話してよいかかわらないため、叔父のことよりも早く病院に行くことを優先した。

2 いつ来るかもわからない叔父からの折り返しの電話を待つことや、停留場に止まるバスの本数が少ないことを考えるよりも、自分で体を動かして走った方が気が紛れるはずだと思い、走り出した。

3 一刻も早く病院に行きたい気持ちと、叔父となかなか連絡が取れずにイライラする気持ちと、一時間に一本しかないバスに乗ることができず焦る気持ちで、どうしてよいかわからず混乱した。

4 小学生の「僕」の足では、叔父の車やバスよりも早く走ることできないとわかっていながらも、「ばあちゃん」のいる病院に一刻も早く駆けつけようということだけが気持ちを占めた。

5 「ばあちゃん」が死んだという知らせを聞き、叔父には電話も通じず、バスは停留場に止まる本数が少ないことから、叔父やバスを待つよりも自分で走った方が早いと判断した。

問三 空欄

ア	エ
---	---

 にあてはまる文として最も適当なものを、次の1～6のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。ただし、同じ番号を二回以上使うことはできない。

- 1 用水路まで行ってみて、初めてばあちゃんの様子がヘンだということが分かった。
- 2 いつも元気なばあちゃんは、相変わらず元気に僕と目を合わせて笑っていた。
- 3 なんだかスローモーションみたいにゆっくりとした倒れ方だった。
- 4 畑から帰ってきたのか、ばあちゃんは手に箒を抱え、ゆっくりと家の裏の用水路の小さな橋を渡った。
- 5 口をパクパクさせていたばあちゃんの体がずるずると地面に平らになり、動かなくなったからだ。
- 6 いつもと違うばあちゃんの顔を見ることなんかできなかった。

問四 傍線部C「笑いながら泣いていた」とあるが、このときの「母」の気持ちを六十字以内で説明しなさい。

問五 傍線部D「あるとき、僕はなぜ、『ああ、間に合った』と思ったのだろう。ばあちゃんの顔が明るくなって、額や口元の皺の全部が消えて、なんだか子どもの顔みたいに見えたとき、僕は、自分がずっと走ってきたのはこのためだったんだと、はっきりと分かったのだ」について、生徒たちが話し合っている。生徒の発言のうち本文の内容に合わないものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

1 Aさん——リップクリームを塗ってあげた「ばあちゃん」の額や口元の皺が消えて、顔が子どもみたいに若返ったことを喜んでるよね。『このため』というのは、「ばあちゃん」を若くしてあげることによって「ばあちゃん」への罪滅ぼしをしているのだね。

2 Bさん——でもこのリップクリームのこと、『僕の体温を吸ってひどく生ぬるく、頼りないほど小さかった』って言ってたよ。これって、懸命に走ってここまで持ってきてても何の役にも立たなかったという思いの表れだと言えるよ。

3 Cさん——そうだね。「僕」は、「ばあちゃん」が普段の生活で愛用していたこのリップクリームを、「ばあちゃん」に渡さないといいないとつさに思ったんだよ。ただ「ばあちゃん」が亡くなってしまったから、この時は無力さを痛感しているんだ。

4 Dさん——「ばあちゃん」が毎日塗っていたこのリップクリームはいつも「ばあちゃん」の顔を少し明るくしていたんだよね。『このため』って、いつもの「ばあちゃん」の顔を見るためということもあったのではないかな。

5 Eさん——『ああ、間に合った』というのは、普段通りの「ばあちゃん」を見ることができたと同時に、「ばあちゃん」を明るい顔にして送ることができたことも意味しているよね。

問六 空欄 X にあてはまる「父」の言葉として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- | | | |
|---------------|------------------|------------------|
| 1 唇だけが輝いている | 2 穏やかできれいな顔だ | 3 死人に口紅を塗ってはいけない |
| 4 間に合わなくてすまない | 5 口紅以外の化粧もしてあげたい | |

問七 この文章の表現に関する説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- | |
|--|
| 1 「僕」の視点によって文章が書かれており、すべての出来事や場面が時系列に沿って展開されている。 |
| 2 「せわしなく」、「うねうねと」、「煎餅みたい」など、比喩や擬態語が多用され、臨場感が感じられる。 |
| 3 「僕は走っている」という印象的な書き出しが、読者をこの物語世界に引き込む表現となっている。 |
| 4 「ばあちゃん」が倒れる場面は抽象的な表現で描かれ、「僕」の意識がぼんやりしていたことがわかる。 |
| 5 「僕」と「母」の親子の日常生活の気持ちの交流を、「ばあちゃん」を通して読み取ることができる。 |

三、次の傍線部について、漢字はひらがなで読みを答え、カタカナは漢字にしなさい。

- | | | | | | |
|---|------------------|---|------------------|---|-------------------|
| ① | 微かな光を頼りに暗闇の中を進んだ | ② | 町の景観を損ねるような建物だ | ③ | 川が氾濫する危険性がある |
| ④ | 彼女は何事にも誠実に努める人だ | ⑤ | この計画の遂行は困難を伴うだろう | ⑥ | ショウサイな説明を求める |
| ⑦ | 美しいビョウシヤの絵を飾る | ⑧ | 困難をコクフクし、目標を達成した | ⑨ | 事件の手口はコウミョウなものだった |
| ⑩ | 新しい条例をセイテイする | | | | |

四、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合上、表記を変えたところがある。

※句読点や記号も一字分とする

二十一日。卯の時ばかりに船出だす。

みな、人々の船出づ。これを見れば、A春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞありける。Bおぼろけの願によりてにやあらむ、風も吹かず、よき日
出て来て、漕ぎ行く。

このあひだに、使はれむとて、つきて来る童あり。それがうたふ舟歌、

※1なほこそ国の方は見やられる わが父母ありとし思へばかへらや
とうたふぞ、Cあはれなる。

かくうたふを聞きつつ漕ぎ来るに、黒鳥といふ鳥、岩の上に集まり居り。その岩のもとに、波白くうち寄す。※2楫取のいふやう、「黒鳥のもとに、白き波
を寄す」とDぞいふ。このことば、何とにはなけれども、Eものいふやうにぞ聞こえた。人のF程にあはねば、とがむるなり。

かくいひつつ行くに、※3船君なる人、※4波を見て、「国よりはじめて、※5海賊報いせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな
白けぬ。七十路、八十路は、海にあるものなりけり。

わが髪いそべの雪と磯辺いそべの白波といづれまされり沖つ島守しまもり

※6楫取いへ」。

『土佐日記』より

※1 なほこそくかへらや……「やはり国の方が振り返られることだ。自分の父母がいると思えば。国に帰ろう」の意。

※2 楫取……船の進行方向を定める役割を持つ人。

※3 船君……船長。

※4 波……白波から海賊を連想している。昔、盗賊のことを白波と言った。

※5 海賊報いせむといふなることを思ふうへに……海賊が報復してくるだろうという風評を心配する上に。

※6 楫取いへ……楫取よ、どちらか言いなさい。

問一 傍線部A「春の海に、秋の木の葉しも散れるやうにぞありける」とあるが、これはどのような様子を例えたものか。その説明として最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- | | | |
|---------------------|--------------------|---------------------|
| 1 複数の船が一斉に港から出航する様子 | 2 複数の船が海上に停泊している様子 | 3 複数の船が海賊に襲撃されている様子 |
| 4 複数の船が波に揺れている様子 | 5 複数の船が転覆している様子 | |

問二 傍線部B「おぼろけの願」、F「程」の本文中での意味として最も適当なものを、次の1～4のうちから、それぞれ一つずつ選びなさい。

- | | | | | |
|------------|------------|------------|---------|---------|
| B 「おぼろけの願」 | 1 ぼんやりした祈願 | 2 並々ではない祈願 | 3 長年の祈願 | 4 欲深い祈願 |
| F 「程」 | 1 服装 | 2 食事 | 3 荷物 | 4 身分 |

問三 傍線部C「あはれなる」とあるが、作者がこのように感じたのはなぜか。その理由を四十五字以内で説明しなさい。

問四 傍線部D「ぞ」は係助詞である。結びの語の活用形として適当なものを、次の1～6のうちから一つ選びなさい。

- | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 1 未然形 | 2 連用形 | 3 終止形 | 4 連体形 | 5 已然形 | 6 命令形 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|

問五 傍線部E「ものいふやうにぞ聞こえたる」をすべてひらがなの現代仮名遣いに直しなさい。

問六 本文の内容に合致するものとして最も適当なものを、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 二十一日の午後六時頃は穏やかな天候で海は静かだった。
- 2 童は大人たちに使ってもらおうとしてついて来た。
- 3 楫取は場にそぐわない発言をしたので、たしなめられた。
- 4 船君は海賊に襲われた経験があり、今回もその心配をしていた。
- 5 船君は海上で長い時間を過ごしたため、頭髮がすっかり白くなった。

問七 『土佐日記』は平安時代の作品であるが、同時代に成立した作品を、次の1～5のうちから一つ選びなさい。

- 1 『日本書紀』
- 2 『方丈記』
- 3 『風姿花伝』
- 4 『日本永代蔵』
- 5 『竹取物語』